

春夏殷劇歌篇

島田修三

ゆゑ知らず不機嫌にあるヒユステラと菜の花飯のにかきを啖らふ

御不浄とふむかしの暗がり出でたれば手水鉢ありきほうから子子遊ばせ

みちのくの秋田あがたの童女うなろにて私わがすとこそいへかな愛しきものを

埒もなく死は来たるべし酒舗出でて行けども行けども露地にただよふ

髪結ひの亭主といふは愉しからむ妻は唄ふも娘この髪梳きつつ

とどろきは東欧州を淹翳しわがクリスタータは咲かむともなし

民族はあはれ哀しき磁場なしてこぞりゆくかも痛けれ深爪

生ひ繁るプロレタリアートの森いづこ霞ヶ関を往きつつもとな

越南に「ホー小父さん」の在りし日や民族主義はずしと思ひつ

べらぼうなる食欲は来て牡蠣飯をむさぼり啖らふ哀しみながら

六月の陽に輝けるくさはらをわが長く見てゆまりせむとす

百年の幼年期終へ嗚呼これのウニベルシタスは発情するなり

七月のあふらのごとき光に濡れ蘇東坡全集上下を購ひ来つ

やまたづの向かひの家庭に潭き涙ありて夜すがら嗚咽す女は

土の上に火を焚かざりし歳月のあはれ長きかな夜の神冷えつつ

しまりなく九月暑^{あつ}けれ汗^{あせ}あへて家持^{いえもち}撰^えりたる雑歌^{ざっか}にくるしむ

しろがねの秋のうろこは夕かげをするどく反^{かへ}し露地^{つゆぢ}の魚店^{うをだな}

夜のふけを金属裂^{くわんじゆ}けたる音^ねひびきそののち嘘^{うそ}のやうにぞ静寂^{しじやく}

太極旗^{たいごく}にたちね包^{かみ}み金嬉^{きんじろ}老^{らう}は白磁^{はくじ}の国^{くに}へ帰^{かへ}りしかなや

昨日^{きの}けふのわいだめもなくひと夏^{なつ}を逝^さかしめこころ砂塵^{さじん}のごとし